

令和5年度 学校評価結果と考察

大分市立豊府小学校

学校経営の重点	年間経営目標	自己評価	学校関係者評価	令和6年度に向けた具体的な改善方策
確かな学力の向上	全学年の国語・算数において単元末テストの正答率が88%以上になる	2学期単元末テストの正答率は、国語88.4%、算数85.5%であり国語については、目標を達成し、算数については未達成である。低学力層児童の割合で、国語0.75%、算数1.17%である。少人数指導、授業プレートを活用した授業の流れの定着、板書や交流の工夫、互見授業や教科担任制による授業改善、少人数指導、補充学習により、特に低学力層へ指導・支援の成果であると考え。	学力向上は授業改善が基本。1学期は、板書の字の大きさや色の使い方など気になる部分があったが、積極的に互見授業が実施され、その結果、子どもたちの学力向上につながっていて、教員の努力がうかがえる。家庭学習の習慣化に向けて、学習カードの活用など学校から積極的に取り組みは進めているものの、取組に対する過程の協力は欠かせない。	・引き続き、全体授業研、一人一実践等、互見授業を積極的に行うことで授業改善に努める。また、少人数指導・補充学習など習熟の程度に応じた個別の指導を効果的に行う。 ・児童及び保護者に家庭学習の意義や取り組み方を再確認し、「家庭学習のすすめ」をもとに家庭学習指導を行う。 ・児童の実態に即した家庭学習の内容を工夫したり、自学のすすめ等具体を示し、家庭と連携して家庭学習の習慣化を図る。
豊かな心の育成	保護者の評価により、子どもの「相手を思いやる心が育った」と回答する肯定的割合が96%以上になる	保護者の肯定的な評価は94.8%で未達成である。目標値は達成できていないものの、数値は高く、学期ごと上昇していることから、校時表に位置付け、計画的に実施している人間関係づくりプログラムの取組、学級での良いとこみつけ、ふわふわ言葉を使う取組等による成果であると言える。また縦割り班活動(7回)での異学年交流も効果的であった。	登下校時の地域でのあいさつが改善されている。定期的な人間関係づくりプログラムの実施、人権集会の開催、ヒューレ大分の体験、いじめ防止対策等豊かな心の育成に向けて策を講じている。豊かな心を育てるためにも、学校のみならず、家庭・地域が協力していくことが大切である。	・今後も人間関係づくりプログラムを計画的に実施し、良好な人間関係を保つことができるようにする。 ・道徳学習による規範意識や思いやりの心を育てる。 ・児童が主体となつてのあいさつ運動の実施・全校への呼びかけ、教職員による率先したあいさつ、地域・保護者への働きかけを行う。 ・YOU&iカードの取組、良いとこみつけを全校・学級ですること、他者理解、自己理解を促進させ、心理的安全性を確保した集団作りに努める。
基礎体力の向上	子どもの「体を動かして遊んだりスポーツをすることが好き」と回答する肯定的評価割合が88%以上になる。	子どもの肯定的な割合が88%と目標を達成している。学習カードの活用により、目標をもって取り組むことができ、達成感を感じながら運動ができている。休み時間に外で遊ぶように、学級レクを計画したり、声掛けを継続することで定着してきている。	休み時間にみんなで外で縄跳びをしている姿を見て、体力向上につながると感じた。全校が同じように取り組んでいる姿は、素晴らしいと思った。学校として特色ある取り組みができるといい。放課後に運動場で元気に遊んでいる姿も見かけるようになった。	・運動量確保を意識した授業を行う。 ・授業のはじめ10分間のサーキットトレーニングに走力強化を取り入れる。 ・体力測定の方法を研修として全職員で理解し、統一する。 ・数値の悪かった項目については重点的に取組をして、学期末には必ず数値測定するなどして、意識と体力の高揚を目指す。

本市重点施策	重点目標	自己評価	学校関係者評価	具体的な改善方策
小中一貫教育の推進	学校や校区の実態に応じた小中合同の研修と取組を実施する。	小中合同の研修等を学期に1回以上実施することができ、各部の取組を周知させることができた。また、取り組みの評価を隔月で行い、改善につなげることができた。小中一貫の取り組みを、学期に1回以上ホームページで発信することで、保護者や地域に取組みについてお知らせすることができた。	9年間を見通して子どもを育てることは大切である。南大分中学校区で「生活のきまり・学習規律」を統一して指導されているのは理解している。中学の一步ノートを6年生が取り組むことにより、中学へのスムーズな移行を目指している。南大分との連携の姿が見えないという実態がある。南大分中学校区でヤングケアラーに該当する児童生徒を把握する必要があるのではないかと。	・小中一貫教育の取組や成果等については、小中一貫教育だよりや学校だよりにより発信し、保護者・地域の方に関心を持つとともに理解を促す。 ・管理職、担当で情報交換を密にとり、連携してそれぞれの部会の取組を進めていく。 ・学習時間、あいさつについては保護者、地域にも協力を依頼し、すすめていく。 ・無言掃除については、中学の良い例を提示し指導していく。
ICTの効果的な活用	児童が授業等でタブレット等端末を活用した割合を80%以上にする。	授業等でタブレット等端末を活用することは全クラスできていて、学習においてICT機器を活用できている。また、児童が「調べる、記録する、学習を振り返る」など学習活動に端末を活用した割合は、学年が上がるにつれて上がっている。ロイノートの有効な活用に学年、学級で差があることが課題なので、今後校内研修等で紹介し、活用の幅を広げていく必要がある。	授業を参観することで、プロジェクターやiPad等のICTを活用した授業が多くあり、いいことだと感じた。ICTの活用は、発表がなかなかできない子にとっても入力することで表現でき、一人一人の意見が大切にされ、きめ細やかな授業につながっていると感じた。	・授業でロイノートが有効に活用できる事は、教職員が理解しているが、全教職員の実践につながっていないところがあるので、有効に活用している実践事例を校内研修等で、実践を通した研修をし、全教職員で同じように活用できることを目指す。 ・今年度取り組みを始めた、ICTを活用した授業実践交流会を計画的に実施する。
働き方改革の推進	業務効率が改善されたと感じる教職員の割合を70%以上にする。	教職員の肯定的な評価は87%と目標を大幅に達成することができた。学校教育目標達成に向けて、全教職員で、現状を把握し、課題を明確にしたうえで取組を検討することで、業務の精選が進み、また校時表を改善することで、時間を意識して業務に取り組めるようになり、行動の変容から意識改革が進んでいる。	教職員が元気でないと、子どもたちも元気にならない。教職員の表情から働き方改革は相応に進捗していると思われる。働き方改革の名前のもとに、地域との結びつきが弱くなっている面もあるのでは。	・教職員と対話を重ねながら、改善できる取組を共通理解し進めていく。また教職員にも自分にできることを考えてもらい、誰が、何を、いつまでに、どれくらい削減するかを提示して実践してもらおう。 ・教職員の勤務時間を把握、超超過の教職員には面談し、問題点をともに考え、改善を促す。